

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成27年 1月 第167号 年間購読料1,000円 (1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

謹 賀 新 年

一年の計は元旦にあり。2015年は団塊世代の全員が高齢者となり、本格的な超高齢社会に入る節目の年です。20年後~30年後の社会を思い描きながら、今為すべき事を考えねばならない、と心も新たに迎えた正月でした。

世は無縁社会と言われ、単身世帯が増えて人と人との関係性が希薄になる中で、高齢者介護・少子化対策・災害時の避難準備など、社会的な関係性を構築する必要が生じる課題に数多く直面しています。

野生動物は、老いて死期を悟ると本能的に群を離れ、世代交代を果たしますが、人間は集団の中で最期を迎え、仲間が看取り歴史が続いて来ました。人間社会の進化・発展の原点が看取りにある、と考えるのが自然な道理ですが、今はその看取りの場が漂流して縁が繋がらず、未来に明るい展望が開けません。

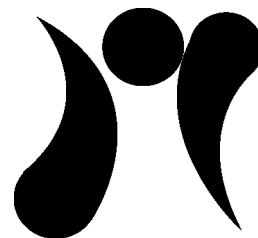
種を保存する為に子を産み育てるのは動物の最も基本的本能ですが、日本では最近の40年間、生れる子どもの数が減り続けています。団塊ジュニア世代は、同級生が200万人を超えていますが、昨年の出生児数は100万人を少し上回る程度になりそうで、日本社会の存続が危ぶまれています。

自然界で生きる動物は、危険を察知すると本能的に逃げますが、東北の地震・津波に際しては、防潮堤を信用し過ぎたり避難指示を待ち続けて、逃げる本能を忘れた人々が大勢亡くなりました。人間も動物としての本能を忘れず、危機を察知する生身の感性を磨き、逃げる勇気を蓄えたい、と切に願います。

人間が生物として受け継ぐ『子を産み育てる』『危険を察知して逃げる』『死期を悟って仲間に委ねる』基本的な本能は、一体的につながった感覚として受け継いでいるように思います。高齢期を生きる一人として、最期を委ねる時期を誤ることがないように、生身の感性と感覚を大事にしたいと願います。

道端の草や木に自然の息吹を感じ、頬を撫でる風に季節の変化を感じます。朝日に輝きを増す東の空に明日を想い、夕

(次ページへつづく)



(前ページのつづき)

陽に染まる西の空に悠久のつながりを想います。枕元を行き交う人の気配に安堵し、味噌汁やコーヒーの香りに生きている事を実感します。

自然の一員として、社会の一員として、そんな生身の感覚を忘れずに生きて、次の世代には本能を退化させることなく生き抜く力を伝えておきたい、と心より念じます。悠久の時を経て続く歴史の一員になる歓びの中で、我が身の全てを他者に委ね、新たな命が誕生する途を照らす光になりたい、と切に願います。

平成27年 元旦

せいりょう園 渋谷 哲

介護についてみんなで語ろう会（12月19日）



テーマ「私はどこにあるのか」

せいりょう園老人介護支援センター
社会福祉士 吉田 知一

今回の語ろう会では、11月22日に毎日新聞に掲載された柳田邦男氏のコラム「柳田邦男の深呼吸」の内容をもとに語り合いました。

○コラムの内容

柳田氏は「子殺し続発、この国のかたち、変だ」と命打って二つの事件を紹介されています。ひとつは、3歳の難病の長女に食事を与えていなかったばかりか、真冬に薄着ではだしのまま閉めだしたり、ベランダの手すりに縛り付けたりし放置し、栄養失調で亡くなった事件。体重は3歳児平均の半分にまで痩せ細り、司法解剖をしたところ、腸内にあったのは、アルミ箔やロウ、タマネギの皮だったという。殺人容疑で逮捕されたのは22歳の父親と19歳の母親である。ふたつ目は、新潟県で起きた同じく3歳の長女を橋から突き落とした24歳の母親が逮捕された事件。

柳田氏はこうした記事を読むと脳内で事件を映像化することができるという。

『虐待されているのに、誰かに助けを求めることも知らずに、家の前で「ママ!」と泣き叫んでいる衰弱し切った幼い子の姿。空腹のあまり、食べられる物と食べられない物の区別もできずに、台所を探したのだろうか、タマネギの皮やアルミ箔を口に入れて飲み込む姿……。私はたまらなくなって、脳内の映像を消そうとするが、テレビの画面をリモコンで切りかえるようなわけにはいかない。自分を大事にしてくれると信じ切っている母親に抱き上げられ、橋の欄干から突き落とされ、暗い空間を落ちていく3歳児の姿が、脳内に広がる。一瞬その子の脳裏に走ったに違いない恐怖心まで伝わってくる。こんなことをどうしてできるのか。』

《平成26年11月22日毎日新聞より一部抜粋》

○参加者の方の意見

柳田邦男氏の言う「この国のかたち、変だ」のコラムを読んでいただいた上で、参加者の方の意見をお聞きしました。

- ・昔は家におじいちゃんやおばあちゃんと住むことで子供に成熟した大人がたくさん関わることが出来た。
- ・昔は近所にお節介なおっちゃんやおばちゃんがいて、自分たちの経験をアドバイスしてくれた。今の時代はお節介を焼くと、ややこしいおっちゃんやおばちゃんに見られる。

- ・昔は兄弟がたくさんいたが、弟や妹の面倒も兄である私が見ていた。しかし、私も遊びたい盛りで、そんな時には、近所のおばちゃんに小さい弟や妹の面倒を見てもらい、その間に遊びに出かけた記憶がある。
- ・家や学校では、知らない人に声をかけられても返事をしないように教育されている。あいさつしても返事が返ってこないことが多い。
- ・日本は物質的には豊かな国になったが、心には余裕がなく貧しい。今の子供を育てている若い世代も家のローンを返済することで日々追われている。そういう世の中を作ったのもその親の世代であることを忘れてはいけない。
- ・自分は年金をもらっているが、日々の暮らしを送る上で十分すぎるほどもらっている。そう思っている高齢者は、年金を若い世代に譲るべきだ。
- ・はたして今の現役世代にお金と時間の余裕を与えたとして、それを本当に心の余裕の為に使えるだろうか。どう使えば良いか分からないのでは。

感想

私には2歳の娘がいます。私が落ち込んでいれば、頭を撫でて元気づけてくれますし、納得出来ないことがあれば自己主張し激しく訴えることもあります。自我は既にあり、一人の人間としての自己の存在が備わっているように思います。

柳田氏の脳内では、3歳児でも私たちと同じく意識や感情があり、「自己」があることをイメージされています。例え我が子であっても他者であり、一人の自己を持った人間である、という視点が親子関係でも他人との関係を築く上でも重要である、と感じています。言い換えるのであれば、私以外の人間にも「自己」があるということを尊重する、という視点になります。

私たちは自分以外の人間の自己や意識を感じることは実際には出来ません。他者が感じていることを想像してみたり理解しようとすることは大切なことですが、それはあくまでも自分に置き換えた自分の思いであり、他者の感じたままを理解することにはなりません。また、自分の感じたままを他者が察してくれることもありません。

本来私たちが出来ることは、他者が思っていることは「他者の思いである」、ということを理解しようとするのと、尊重することだけなのです。その人の人生の主役はその人である、と認識し尊重することが大切です。

子供には、その人の人生において主役である権利があります。しかし、様々な背景があり、親が育てることが出来ない場合もあります。その場合、社会に委ねるといふ他者への信頼と、その判断を許容する社会が必要だと感じています。「虐待」以外の選択肢を選ぶことの出来る成熟した「大人」になる必要性を感じます。

このことは、子育てだけに限らず、高齢者介護にもいえることだと思っています。

【せいりょう園空き情報 平成27年 1月15日現在】

- ① ケアハウス：3室（バス・トイレ・キッチン付24㎡）
- ② グループホーム：空きなし
- ③ グループホームまどか：空きなし
- ④ サービス付き高齢者向け住宅「リバティかがわ」：1室
- ⑤ サービス付き高齢者向け住宅「自愛の家さくら」：空きあり

【問合せ先】 せいりょう園 TEL(079)421-7156 / (079)424-3433

Kさんの看取りを振り返り、感じたこと



ヘルパーステーション
三島美子（非常勤職員）

高齢者向け住宅のリバティかこがわに入居されていたKさん(男性)が亡くなられたのは今年の9月6日でした。享年94歳でした。現在(いま)も、喫茶ラヴィックの前にあるピアノを見ると在りし日のKさんの姿を偲ぶことがあります。

Kさんは平成15年より約6年間奥さんと共にせいりょう園のグループホームⅡで過ごされていました。認知症になった奥さんの世話がしたいという思いと、本人が自宅で圧迫骨折され独居生活が困難な状態となったことを機にグループホームⅡで同居となりました。

奥さんが亡くなられ、そのまま継続しての入居を勧めましたが、本人は自宅での生活を強く望まれました。当時、要介護認定を受けており、車いす生活での一人住まいは困難で、御家族も入居希望がありました。とりあえず平成21年に、リバティかこがわへ入居となりました。

入居された時の第一印象は、何となく近寄りがたい頑なで気難しそうな方にみえました。当時の話をケアマネジャーに聞くと「僕に何かあれば直ぐ救急車を呼んでほしい。元気になる。努力すれば報われる。僕は頑張るから！」と話されていたそうです。自宅への帰宅願望が強くあったのか、その言葉通り毎日廊下の手すりを持ちながら歩行練習を始められ、車椅子から歩行器使用となり少しずつ距離をのぼし外にも出かけられるようになりました。

暑い夏も、寒く冷たい冬も変わらず毎日続けておられました。部屋で手足の運動をし、散歩に行かれ、毎週金曜日にあるピアノ教室で歌を歌い、他の高齢者や地域の方々とも交われ積極的にご自身の交流範囲を広げられ、充実していることで穏やかな表情になられたようでした。必然的に要介護→要支援になりました。元々口癖で「できる限り自分のことは自分でしますから」と言われていましたから、ヘルパー利用は生活援助のみで、あとは食事のセットを介助させて頂きました。

Kさんは、マイペースで自分の時間配分を決めてスケジュールを立てている方なので、その予定が変わったり自分の考えている事と違うと立腹され、感情的になられることがあり、ケアマネジャーや関係者に自身が納得できるまで説明を求める一面もある方でした。

1年くらい前より、喫茶ラヴィックの前にあるピアノを弾かれるようになりました。本人にとっては自由に使わせて貰えて楽しい時間であったのではないかと思います。譜面を見ながら、たどたどしかった音がメロディーとなったとき私は感動しました。年齢に関係なく興味あることにチャレンジする姿は、入居者だけでなく聴かれていた方々にも元気を届けていたのではないかと思います。このような生活の中で奥さんの納骨を終え、ご自宅も売却されたと話されていました。「全ての手続きを自分で行った。」と満足そうでした。強かった帰宅願望は既になく、リバティかこがわを終の棲家にと決めたのは、諦観ではなく安心して暮らせる環境で、あるがままに認めて貰えるここでの生活を選ばれたのだと思いました。ここで働く職員として素直に嬉しかったです。

穏やかな生活に変化が現れたのは今年の8月でした。食欲が落ち、肺炎の疑いがあるとの事で検査入院をされました。本人の希望で精密検査は受けず、退院が決まりケアマネジャーと主任が、お見舞いを兼ねて病院に行くと、ベッドに拘束されたKさんがいました。随分と

瘦せられ、表情も陰しく、見当識障害が少しあったとの事でした。一か月近い入院で大きくレベル低下をしていましたが、退院されてリバティかこがわに帰られた時の表情は、安堵感からか笑顔がみられました。担当ケアマネジャーに「僕をどこにもやらんで下さい。頼みます。」と話されたとのことでした。

要支援で入院され、退院後は全介助が必要な状態でした。やがて看取りの時を迎え、ターミナル対応となりました。日増しに状況が変わる中で、同室に、ケアマネジャー・訪問看護師・ヘルパーが一緒にいる事もあり、互いに情報共有して共通認識を確認し、Kさんの意思を確認し尊重することを心掛けました。車椅子への移乗、歯磨き、うがい、口腔ケアを希望され、行くと「気持ちいいー、あーうれしいなー。」等と喜びを声に出され、いつもされていたであろう手指の運動や、やっと動かせているように見えるその腕を、伸ばしたり縮めたり、とても嬉しそうでした。Kさんは最期まで自分を貫かれ、自己実現を完結されました。

娘は、いつ来ますか?と聞かれ、明後日の予定を伝えると「そうですか。」と安心された顔をされました。遠く北海道から来られた最愛の娘さん御夫婦に会われ、見守られながら静かに逝かれました。私たちのチームケアに対し、沢山のありがたい言葉をKさんより頂けたことは、励みとなりました。



ケアハウスでは、ボランティアの皆さんと共に皆でクリスマスソングを歌いました。



リバティかこがわでは、華やかなマジックショーを開催。拍手喝采でした。

毎年、12月24日は、せいりょう園で「クリスマス会」を楽しみます。職員が入居者・御家族に「今年も無事に過ごせて良かったこと」等を、労ったり、話し合いました。忘年会のような宴となりました。



ユニット型特養では、ヘルマンハーブによる演奏。入居者・御家族・職員もハーブの音色に癒されました。



地域密着型特養では、毎年来て頂く「紅の会」の鮮やかな日本舞踊を披露して下さいました。

グループホームより

2014年のクリスマス会で、入居者多木さんの御長男がギターを持参され、伴奏しながら自作自演で『お母ちゃんの歌』を披露して下さいました。

しみじみとした曲と歌詞で、周囲の聴いていたグループホーム入居者の皆さん、御家族、職員は、お母さんへの愛情を強く感じ、ほのぼのと温かい気持ちになりました。歌詞を掲載させていただきます。



「お母ちゃんの歌」



うちのお母ちゃんは 若い時から 働きずくめで
子どもを三人育てて そして 小さくなっちゃった
いつまでも お母ちゃん 元気でいてよね

トレードマークの 帽子を被って ニコニコ笑ってる
ピンクの帽子や ベージュの帽子や いろいろ被ってる
いつまでも お母ちゃん 元気でいてよね
いつまでも お母ちゃん 元気でいてよね

うちのお母ちゃんは ベッドに ちょこなんと座って 本を読む
特に好きなのは 時代小説で 鬼平犯科帳
いつまでも お母ちゃん 元気でいてよね

小さな時から 歌が大好きで 独りで歌ってた
今では 声も出にくくなったが 楽しく歌っている
いつまでも お母ちゃん 元気でいてよね
いつまでも お母ちゃん 元気でいてよね
いつまでも お母ちゃん 元気でいてよね
いつまでも お母ちゃん 元気でいてよね

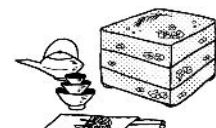


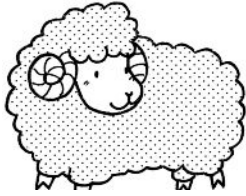
厨房だより

管理栄養士 田村愛弓

新年明けましておめでとうございます。皆様どのようなお正月を過ごされたでしょうか。おせちや雑煮は食べられましたか。せりょう園では手作りのおせち料理とともに日本酒を提供させていただき、入居者の方々は久しぶりのお酒に舌鼓をうちながら御馳走を食されていました。1月はおせち料理以外にも7日に七草粥、11日には鏡開きでぜんざいを提供し、お食事では正月の始まりと終わりを演出させていただきました。

今年もお食事では季節を感じ、入居者の方々の生活に彩を与えられるような献立を提供していきます。





年末年始は、沢山のイベントがありました。
職員だけでは、運営は不可能です。
様々なボランティアの皆さんの協力を頂きました。
いつも有難うございます。



平成 26 年 12 月 26 日 (金)

『おもちつき』

毎年、男女総勢 20 名近くのボランティアの皆さんが、対応して下さいます。杵と臼でつく様子を見て楽しみました。



平成 27 年 1 月 1 日 (木) 元旦

『新春祝賀会』

ケアハウスでは、毎年一人ずつに二段重のお節料理を提供します。皆で集まり、お喋りしながら新年の門出を祝いあいました。



平成 27 年 1 月 9 日 (金)

『初詣』

参拝希望者と共に、浜の宮神社に出かけました。毎年神主さんの有難い祝詞を伺い、お札を沢山頂きました。新年早々に清々しい想いを致しました。



平成 27 年 1 月 11 日 (日)

『和太鼓』

和太鼓は「聴く」より「感じる」という表現が合います。心に響く音を感じとりました。今回は和太鼓経験者の職員が飛び入り参加。和やかなヒトトキでした。



【せりょう園待機者状況 平成27年 1月 9日現在】

○入所判定済み者 345人 (グループの内)

Iグループ…113名 IIグループ…130名 IIIグループ…102名

※このグループ分けは、県の「入所判定マニュアル」に基づき、緊急性を評価して分けています。Iグループが最も緊急性の高いグループとなっています。

判定後、状況の変化がありましたら、ご連絡下さい。



『認知症の人とお茶するカフェを』

—認知症の人に学ぶ姿勢を学ぶ場として—



認知症の人を生活の主役として介護する時、主役に対するマナーとして、予防を口にするには差し控えたい、との想いが生じます。

認知症になっても尚、ベストを尽くして懸命に生きるその姿に対して、敬意を持って学ぶモラルをわきまえたい、と願います。

本能的に死期を悟り、他者に身を委ねる『誇り高き姿』に対して、その誇りに応えるプライドを持って介護したい、と願います。

ご家族や認知症サポーター・ボランティア・地域の方がたには、その『マナーとモラルとプライド』をお伝えし、次の世代が老いを生き切る思想を引継ぐ為に、協働の関係を築きたい、と願います。

『老いの命を看取り弔う』営みは、人間社会が発展してきた原点であり、高齢社会における介護は、『死の創造性』を支えて未来への途を照らす『敬愛すべき職業』だ、と確信します。

共にお茶する淡い関係の中で在るがままに振舞う仕草や表情に、命と引き換えに伝える『命より大切なもの』を秘めています。

平成27年1月

地域サポート型特養せいりょう園

老人介護支援センター

※カフェの名称を募集します。良い言葉が閃きましたら、老人介護支援センターまでお知らせ下さい。宜しくお願いします。

電話 (079) 421-7156

担当：入江・武井